崇徳院の怨霊と後白河院、そして清盛

――崇徳院怨霊譚の物語化の問題をめぐって――

朴　恩姫

一　はじめに

崇徳院怨霊は、院政期の人々に最も畏怖された怨霊である。崇徳院の死や怨霊化の過程は物語の格好の素材になり、以後崇徳院怨霊は『保元物語』を始めとして『平家物語』『太平記』などの軍記物語や『松山天狗』『雨月物語』などに登場し、或いは怨霊として或いは天狗として活躍することになる。崇徳院というと、怨霊としてのイメージが強いが、すべての本が必ずしもその怨霊化に焦点を合わせているとは言い難い。なぜならば、崇徳院の生い立ちから死に至るまでの過程を記述しながら、その怨霊化についてはまったくふれない『今鏡』のような本も存在するからである。山内益次郎が指摘しているように、崇徳院は、その数奇な生誕や和歌に対する情熱、悲劇的な生涯など生前の話題はもちろん、崩後の怨霊慰霊の話題にいたるまでたくさんの話題をもっている。[1]にもかかわらず、そのたくさんの話題をさしおいて、『平家物語』が怨霊譚にだけ焦点を当てて語っているのはどうしてであろうか。この問題は、『平家物語』に崇徳院怨霊関係説話が、『保元物語』に劣らぬ分量をもって語られる理由にもつながっていると思われる。この問題を明らかにするために、本稿では、崇徳院の霊が恐るべき怨霊として認識される過程を追跡し、さらに『保元物語』や『平家物語』のような物語に結実する際、どのような変化が起こったのか、すなわち物語と史実の断層に注目しようとする。

延慶本『平家物語』のなかで、崇徳院の怨霊は四回にわたって注目される。一回目は怨霊の跳梁を恐れて安元三年に行われた追号である。二回目は建礼門院の御懐妊の際、鹿谷事件の死霊や生霊とともに顕れて建礼門院を悩ましたことであ

る。三回目が治承三年のクーデター後にある者が見た夢想で、そして最後が寿永三年四月の崇徳院廟の建立の記事である。安元三年の追号や寿永三年の崇徳院廟の建立の記事は、言うまでもなく編年記事的な色彩が強い。しかし、崇徳院怨霊譚はただの編年記事として語られているだけではなく、『平家物語』の構想上語られなければならない或る必然性があると思われる。本稿は前述の枠組みの下で、その必然性がどこに起因しているのかという問題に注意しながら、『平家物語』における崇徳院怨霊譚について検討していきたい。

二　崇徳院怨霊の登場――安元三年の世相――

院政期だけではなく、以後の日本の歴史のなかで絶えず語られてきた崇徳院の怨霊が、人々の脳裏に強く刻印されたのはいつ頃からであろうか。崇徳院怨霊の初出は、周知のとおり『愚昧記』の安元三年（一一七七）五月九日の記事で、長寛二年（一一六四）の死から十数年後のことである。『保元物語』に代表される崇徳院の強烈な怨念や祟りに比べると、崇徳院の怨霊としての登場は案外遅く、死後すぐというわけではない。植木朝子の崇徳院関係記事年表[2]をみると一目瞭然であるが、崇徳院怨霊は院政期をとおして常に猛威を奮ったのではなく、幾つの時期に集中的に発現することで畏怖された。その最初が安元三年であった。安元三年に行われた追号の背景には、このような跳梁する怨霊への畏怖心があったといえる。では、崇徳院の霊はいかなる過程を経て怨霊として畏怖されるようになったのであろうか。

崇徳院は保元の乱で後白河天皇が率いる官軍と戦うが、負けて仁和寺に身を寄せ、すぐさま出家をする。その出家は刑罰の軽減を望んでのものであったろうが、その期待も空しく讃岐に配流される身となる。天皇であった院の配流は、人々の耳目を驚かす大事件であった。讃岐までの長い道程は、『保元物語』や『平家物語』諸本に哀調深いトーンで語られている。天皇として、あるいは院としてあった過去の栄華と、それに対して旅に随う近臣もなく、ただ女房二三人をつれて讃岐に向かう今の心細さが対比され、都を離れる悲しみや不安が克明に語られている。

長キ一宇ノ屋ヲ立テ方一丁ノ築垣アリ。南ニ門ヲ一ツ立テ外ヨリ鎖ヲ指タリケリ。国司ヲ始トシテアヤシノ民ニ至マデ、恐ヲ成シテ、言問参ル人モナシ。　（二〇五～二〇六頁）

右の引用は配所での崇徳院の生活を象徴している文章である。築垣によって周囲と遮断されているばかりでなく、一つある門には錠がさされていて、誰もたやすく中に入れず、又中にいる人も外に自由に出られない状態になっている。このような描写から窺える過酷な配所生活は、自然と崇徳院の怨念を育てる土壌となるのであるが、史実はこのような物語表現とはかなり違うものであったようである。山内益次郎は、『直島旧跡順覧図会』の分析をもとに、院の直島における生活はある程度自由が利くものであったと論証している。[3] つまり崇徳院やその関係者に縁故のある地名をとおして、崇徳院が御所を出て各地に御幸したり、皇子・皇女・寵妃がこの島にいた可能性を指摘しているのである。また、山田雄司は、崇徳院の歌を憤りに満ちた姿を想像させる後鳥羽院の歌と比較し、讃岐に流された崇徳院は実は穏やかであったと述べている。[4]

一方、讃岐配流中に訪れた寂然との贈答歌や西行の歌への返歌などをみても、都から離れた悲しみや往生への願いが歌われており、比較的平穏だったかも知れない配流の日々を詠むことも、怨念という趣向も見あたらない。穏やかであったかどうかは別にしても、崇徳院が寂然に送った「思ひやれ都はるかにおきつ波立ちへだてたるこゝろぼそさを」という歌と、隠岐に流された後鳥羽院の「ながむればいとゞうらみもますげおふる岡辺の小田をかへすゆふ暮れ」という歌を並べてみると、怨みという面で歌の趣向がはっきり異なっていることがわかる。後鳥羽院が「うらみ」を直叙しているのに対して、崇徳院の歌は「こころぼそさ」という表現で怨みを包み込んでいる。激情ではなく、心の奥に沈潜させた詠みぶりである。

悲しみだけが前景化されている崇徳院の歌の趣向は、『今鏡』の崇徳院関連記事の著述姿勢にもつながっているといえる。というのは、周知のとおり、『今鏡』には崇徳院に関する数多い記事が載せられているが、そのなかに怨霊としての登場はないからである。つまり、重仁親王やその母兵衛佐の保元の乱以後の消息にまで詳しく踏み込んで書いているにもかかわらず、なぜか怨霊に化する示唆的な叙述すらみえない。『今鏡』の作者寂超は、彼自身崇徳朝蔵人であり、弟寂然や西行との関わりを考えると、崇徳院ゆかりの人々に対する関心、そしてそれと表裏をなす情報源があった[5]と思われる。にもかかわらず、崇徳院怨霊譚が『今鏡』には見えない理由について、多賀宗隼のように、貴族社会の繁栄を確認する『今鏡』の著述姿勢[6]をあげることも、山田雄司のように『今鏡』が崇徳院が怨霊化する安元年間以前に書かれた故[7]だと考えること

も可能である。安元三年の崇徳院怨霊の初出や、後白河院が崇徳院の死に際して服喪もしなかったほど、崇徳院の存在をまったく気にしなかった（『玉葉』安元二年九月十七日）ことなどを考慮にいれると、ある時期になって崇徳院の怨霊が突如発現するようになったということには間違いないだろう。

では、保元の乱直後はもちろん、崩御後にも全く意識されなかった崇徳院の秘められた怨念が、いかなる契機によって歴史の上に怨霊という姿をもって登場してきたのであろうか。死後十数年を経て突然世上惑乱の元凶として崇徳怨霊が躍り出た背後には、原水民樹が指摘しているように、世変と崇徳院を結びつけようとする、言い換えれば崇徳院の復権を願う崇徳院の縁者や旧臣の意図が作用している。[8] そして彼らのなかに胚胎した崇徳院怨霊は、治承寿永の内乱を経験した人々の心のなかで自由に一人歩きを始め、もはや一個人が制御することのできるものではなくなった事実も忘れてはならない。その人々の心のうちにまさに物語の世界があるからである。

ところで、『愚昧記』安元三年五月九日の「相府示給云、讃岐院并宇治左府事可有沙汰云々、是近日天下悪事、彼人等所為之由有疑、仍為被鎮彼事也、無極大事也云々」という記事からは、この時期すでに崇徳院や頼長の怨霊の跳梁と「天下悪事」が結びつけられていることがうかがえる。ここで問題になるのは「天下悪事」の具体的な内容であろう。安元三年五月九日という日付を考慮すると、「天下悪事」に該当する事件は、高松院姝子を始めとする四人の院号をもつ人の死、白山事件、安元の大火などであろう。高松院姝子等の死は、『玉葉』安元二年七月一八日条に「凡両月之間、三院崩逝、古今未有希代事也」と記されるほど、尋常な出来事ではなかった。また山の大衆が師高の流罪を要求し、神輿を奉じて入京し、とうとう武士と武力衝突を起こした白山事件は、安元三年五月五日、後白河院がこの事件の責任を問い、天台座主明雲を解任することで、ますます緊迫さを増していた。そして安元三年四月二八日に樋口富小路より出火した火災は、王権の象徴でもある大極殿までも焼いてしまう大規模なものであった。

このような背景をふまえて、安元三年七月二九日の崇徳院の追号に関する人々の反応を見てみよう。経房はこの件に対して『百錬抄』で「讃岐院奉号崇徳院。宇治左府贈官位太政大臣正一位事宣下。天下不静。依有彼怨霊也」と記述している。延慶本の追号の記事にも、「思ノ外ナル事共アリテ世間モ静ナラズ。「非是直事。偏ニ怨霊ノ致ス所ナリ」ト人々被申ケレバ、加様ニ被行ケリ」とあり、『百錬抄』と似た表現になっている。この二つの文章は『愚昧記』と同じく、崇徳院怨霊と不安に満ちた世相とを結びつけている。ただし先程見た『愚昧記』の記事と異なるところは、不安な世相のなかに

鹿谷事件が含まれていることである。七月二九日という日付だけを念頭に置くと、「天下不静」の内容は当然五月末から六月まで世間を騒がした鹿谷事件ということになるだろう。しかし史実としてみれば、もともと崇徳院や頼長の慰撫行事は、鹿谷事件と全く関係なく進められたはずである。というのは、『愚昧記』安元三年五月十三日条の「又去年為用意仰彼両人并永範卿・師直等令勘儲也」からわかるように、安元二年にはすでに頼業・師尚・永範・師直等に対し勘文の提出が命じられていたからである。つまり、安元二年に始まった慰撫行事の論議は、先例をめぐる紆余曲折を経て七月二十九日の実施へとたどり着いたのである。[9]

復権をめざして崇徳院ゆかりの人々の間に生まれた、不安定な世相の動因としての崇徳院怨霊という言説は、当初関係がなかった鹿谷事件をも含みながら段々膨脹しはじめたのである。崇徳院怨霊と鹿谷事件との結びつきは『愚管抄』にもみられる。

安元三年七月廿九日ニ讃岐院ニ崇徳院ト云名ヲバ宣下セラレケリ。カヤウノ事ドモ怨霊ヲオソレタリケリ。ヤガテ成勝寺御八講、頼長左府ニ贈正一位太政大臣ノヨシ宣下ナドアリケリ。サテ又コノ年京中大焼亡ニテ、ソノ火大極殿ニ飛付テヤケニケリ。コレニヨリテ改元、治承トアリケリ。入道カヤウノ事ドモ行ヒチラシテ、西光ガ白状ヲ持テ院ヘ参リテ、（中略）コレヨリ院ニモ光能マデモ、「コハイカニト世ハナリヌルゾ」ト思ヒケル程ニ、[10]

鹿谷事件に関する長い叙述の後に、引用のように崇徳院追号が語られている。「サテ」以下の大火に関する叙述を挿入句としてかっこで括っておくと、話は直接に清盛が西光の白状をもって後白河院に会いにいったという叙述につながる。つまり、鹿谷事件の叙述のなかに崇徳院追号が語られているわけである。とすると、追号の理由に当たる「カヤウノ事」が指している内容は、当然鹿谷事件とみてよかろう。慈円は安元二、三年に起こった様々な衝撃的な事件のなかでことさらに鹿谷事件を前景化し、その背後に崇徳院怨霊の働きがあったと叙述している。これは時間が経ったゆえの混同によるものではない。むしろ崇徳院怨霊譚が展開される一つの方向性を示しているといえる。その方向性とは何か。それは世の乱れを背景とした清盛と崇徳院怨霊の結合である。次節では、崇徳院怨霊譚が清盛の悪政と結びつく具体的な様態について考察したいと思う。

三　清盛と崇徳院の怨霊の結合――怨霊の枠を超えて――

前節では主に崇徳院怨霊にかかわる言説が、どのような土壌で作られ、いかなる方向に発展していったかについて考察したが、当代の人々がだれでも崇徳院の怨霊と世の乱れをすぐさま結びつけたのではない。たとえば『玉葉』の九条兼実は、崇徳院追号について少なからぬ疑問や不満をもっていたようである。つまり、太上天皇の贈号の先例がないことや、「崇徳」という字にあまり甘心できないと述べている。特に注意すべきのは次の文章である。

已是朝家大事也。尤可有議、而無左右被行之、如何之由、世人傾奇云々、余案此事、偏可在叡慮、他人不可申是非事也。[11]

この引用文は、左大臣経宗の指揮によって行われた崇徳院追号は、もはや朝廷の大事になっているので、慎重に論議を重ねて決めていくべきであることを指摘した上での結論にあたる。すなわち、崇徳院の追号を含む慰撫行事に関しては、基本的に朝廷を含む他人が関与すべき問題ではなく、あくまでも後白河院が主導になって対応しなければならない問題であるという立場を表明している。このような発言の土台になっているのは、平安王朝の怨霊観であるといえる。つまり、崇徳院と不安な世相を結びつけず、『大鏡』に代表されるように、主に怨敵の家系に祟り、死や狂気を招くという縮小された怨霊観のなかで崇徳院の怨霊を理解しようとしていることが引用から読みとれる。

では、崇徳院怨霊の場合、怨敵すなわち後白河院やその家系の誰かに死や狂気を引き起こすなどといった王朝的な怨霊としての発動の事例はないだろうか。前節でふれた安元二年の四人の院号をもつ人の死を挙げることができると思われる。六月十三日に高松院姝子、七月八日に建春門院、七月十七日に六条院、八月十九日に九条院呈子が立て続けに死んだ出来事である。死んだ四人は、それぞれ二条天皇の中宮、後白河院の女御、後白河院の孫、忠通の養女で近衛天皇の中宮であり、後白河院や忠通周辺の人々であるという共通点をもっている。当時の怨霊は、もし怨敵が手強くて祟ることができない場合、その家系のなかの弱者、たとえば子供や女性に祟ると信じられていた。[12] したがって、わずか三か月間に四人の近親者の死によって、それらを後白河院に対する崇徳院の怨霊の祟りと感じた可能性は十分に考えられる。

さて、『平家物語』ではこの出来事はいかに叙述されているだろうか。四人の死が全部語られている諸本はなく、九条院呈子を除く他の三人の死が語られているのも延慶本と長門本ぐらいである。他の諸本は六条院の死についてふれるだけである。しかも延慶本と長門本のように一つの編年記事として語るのではなく、安徳天皇の立坊と践祚を語りながら、関連記事として六条院の崩御を語るという形になっている。その際、叙述の焦点は三歳の甥である天皇と六歳の伯父の東宮というアンバランスに当てられており、崩御自体はそれほど注目されていない。建春門院の死も、亡くなる一年前の熊野参詣での奇瑞や供養のために出された殺生禁断令にまつわる玄尊の逸話などが載せられており、崇徳院の怨霊の影はまったく見えない。『平家物語』のなかの安元二年の記事は、一言でいって、崇徳院の怨霊とは無関係に叙述されている。

しかし叙述の表層においては崇徳院怨霊は出てこないが、四人の死と崇徳院怨霊の関係を考察する際、延慶本の次の叙述は注目に値する。

同廿七日、六条院崩御ナル。御年十三。故二条院ノ御嫡子ゾカシ。御年五歳ニテ太上天皇ノ尊号アリシカドモ、未ダ御元服モ無テ崩御ナリヌルコソ哀ナレ。加様ニ打続天下ニ歎ノミ多ク、人ノ心ノ定ラザル事ハ、偏ヘニ平家ノ一門ノミ栄テ、一天四海ヲ掌ニ拳テ、先例ニ違ル務ヲ申行ヘル故トゾ、内々ハ申アヒケル。（九二頁）

（傍線は引用者、以下同様）

傍線の部分は、六条院の死だけではなく、高松女院から始まった三人の死をまとめている箇所である。その趣旨をいえば、高松院姝子、建春門院、六条院の三人の死という悲しみの連続はもっぱら平家のせいとされている。つまり、平家が栄え、清盛が政界の重要なポストを占めるが、その政治があまりかんばしくないゆえに、このような不幸な出来事が続いて起ったというのである。三人の死と清盛の栄華や悪政が直接に結びつけられていることが引用から読みとれる。ところが、安元二年時点での清盛の悪政というと、殿下乗合事件ぐらいで、これも清盛の代表的な悪行とはいえない。とすると、「先例ニ違ル務」とは、清盛の政治に批判的な語り手の意識が先走った表現になっている。崇徳院怨霊の仕業ならともかく、三人の死と清盛の栄華や悪政とは一体どこで接点をもっているのであろうか。

この問題と関連づけて、『保元物語』半井本の次の引用をみてみよう。

蓮如ガ夢ニ見タリケルハ、讃岐院ノ四方興ニメシテ、為義父子六人先陣ニテ、平家忠正父子五人、家弘父子四人後陣ニテ、院ノ御所ヘ打入ラントスルガ、（中略）「サラバ清盛ガ許ヘ舁入ヨ」ト被仰ケレバ、無相違打入テ、院ヲモ入進セツト見タリケレバ、其後、清盛、次第ニ過分ニナリ、太政大臣ニ至リ、子息所従ニ至マデ、朝恩肩ヲ并ル人ゾ無。ヲゴレル余ニ、院ノキリ人中御門ノ新大納言成親卿父子ヲ流シ失ヒ、西光父子ガ首ヲ切リ、摂録臣ヲ備前国ヘ移シ奉リ、終ハ院ヲ鳥羽殿ヘ押籠進スルモ、只讃岐院ノ御祟トゾ申ケル。[13]

右の引用はいわゆる〈蓮如の夢〉と呼ばれる夢語りである。夢の内容は崇徳院一行の悪霊が後白河院の御所に入ろうとしたができず、清盛の邸に入ったということである。ここで注目したいのは、傍線部分の語り手の夢の解釈である。崇徳院の霊が清盛の邸に入った結果は、他ならぬ平家の栄華であり、過分な振る舞いの象徴としての鹿谷事件や治承三年のクーデターであるとされている。後白河院の近臣を処刑したり、関白基房を配流したり、後白河院を鳥羽離宮に幽閉したりする一連の行動、あるいは周囲の耳目を驚かす平家一門の昇進の背後にも崇徳院の怨霊がうごめいていたということである。崇徳院の霊が清盛の栄華や悪政を紡ぎ出す。そういう意味で、夢の解釈は〈冥〉と〈顕〉の二元論に立っているといえる。それは別の言い方をすると、世を乱そうとする崇徳院怨霊の本望は、崇徳院怨霊自身によって直接満たされるのではなく、清盛によって代行されることを意味する。元来怨霊の祟りとして理解すべき三人の死が清盛の栄華や悪政のせいとされている延慶本の叙述は、右の引用のような、崇徳院怨霊の世上へのはたらきかけは清盛の悪行に媒介されているという認識を背景に生まれたものであったといえる。

ところで、この夢想は、『平家物語』諸本の中では、延慶本や長門本、『源平闘諍録』、『源平盛衰記』にみえる。いずれも清盛の悪行と結びつけられているという共通性をもっているが、語られる位置が異なることによって、その悪行の内容も微妙にずれている。たとえば、延慶本と『源平盛衰記』では、治承三年のクーデターのなかで語られることで、悪行の内容もそのクーデターになっている。長門本は頼長贈官記事に続いて語られている。この場合、悪行の内容として二年数ヶ月後の事件である後白河院の鳥羽幽閉まで含むことになり、先走った表現になっている。[14]『源平闘諍録』の場合、崇徳院の崩御後、「其の頃」の出来事として語られており、崇徳院崩御後の清盛の悪行を漠然と指している。原水民樹は、それ

ぞれ異なる諸本の内容を分析した上、この夢想は治承三年のクーデターと関係して生まれた夢語りの一つである[15]と指摘している。説得力のある見解であるが、本稿では発生源とともに、この夢語りが以後物語においてどのように展開されていったのかという側面を注視したい。とすると、この夢語りは治承三年クーデターという特定事件との関係は色褪せ、ただ清盛の悪行と崇徳院の怨霊の働きかけを語る夢語りだけになってしまう。『平家物語』の崇徳院怨霊譚における〈蓮如の夢〉の位置と意味を問題にするならば、肝心なのは、治承三年クーデターという具体的な事件ではなく、清盛と崇徳院の怨霊の結びつきそのものであろう。

しかし、このように崇徳院怨霊と清盛の栄華や悪政を直接結びつけることは、もはや王朝的怨霊観をもっては説明不可能である。なぜならば、もし王朝的怨霊として清盛に祟るとすると、清盛かその家系の誰かに、直接死や狂気をもたらすのが一般的であるからである。清盛という為政者に働きかけ、その人が悪政をするように作用するといった間接的な方法で世の中に不安をもたらすのは、もはや怨霊ではなく、『太平記』のなかに数多く登場する天狗の特徴である。つまり、『平家物語』の崇徳院怨霊は、人の心の隙間を狙い、入れ替わることにって世を乱すという憑依現象をあわせもっており、そこには天狗化の萌芽がみえているといえる。崇徳院復権のために縁者たちによって語られ始めた怨霊譚は、不安な世の中を背景に、怨霊の枠を超えてさらに拡大していったのである。

四　「生ナガラ天狗」――崇徳院怨霊譚の物語的展開を中心に――

延慶本には、『保元物語』と酷似した形の、保元の乱の経緯や乱後の敗者の死と怨霊化を語る記事がある。「讃岐院之御事」「宇治ノ悪左府贈官等ノ事」「西行讃岐院ノ墓所ニ詣ル事」がそれである。『保元物語』のダイジェスト版ともいえるこれらの記事は、他の読み本系諸本にもみえる。その内容は概ね同じであるが、幾つかの点において諸本間に差異が生じている。これらの相違点に注意しながら、崇徳院怨霊譚の核ともいえる五部の大乗経をめぐる怨霊譚において崇徳院怨霊の天狗への変容の問題を考察してみよう。

まず崇徳院の怨念を語る延慶本の次の引用を見てみよう。

（略）自天竺振旦至日本吾朝、位ヲ争ヒ国ヲ論ジテ、叔父甥合戦ヲ致シ、兄弟闘諍ヲ起セドモ、果報ノ勝劣ニ随テ、叔父モ負、兄モマク。雖然時移リ事去テ、罪ヲ謝シ、讎ヲ飜スハ、王道ノ恵ミ、無偏ノ情也。（中略）是ハ可被責之由聞シカバ、其難ヲ遁ル、方モヤト防シ計ナリ。サシモ罪深カルベシトモ不覚。是程ノ有様ニテハ、帰リ上テモナニカセム。今ハ生テモ又何ノ益カアラム」トテ、御グシモメサズ、御爪ヲモ切ラセ給ハズ。柿ノ頭巾、柿ノ御衣ヲ召ツ、、御指ヨリ血ヲアヤシ、五部ノ大乗経ヲアソバシテ、

（二〇六～二〇七頁）

引用は崇徳院が後白河院の乱後の処置の非情さを訴える部分である。崇徳院は、戦いの勝敗は前世における後白河院と自分の業の優劣によるものであると、負けたことに対して素直に受けとめている。しかし、一旦戦いが終われば、勝者は負けた人々を許すのが王道のあるべき姿であると力説する。したがって「是ハ可被責之由聞シカバ、其難ヲ遁ル、方モヤト防シ計ナリ。サシモ罪深カルベシトモ不覚」という表現からわかるように、崇徳院には罪の意識がない。出家して自分の政治的生命を放棄したにもかかわらず、配流の身になってしまったことに対する恨みが前景化されている。そこに崇徳院怨霊譚の始発がある。延慶本では、この段階ですでに「御グシモメサズ、御爪ヲモ切ラセ給ハズ。柿ノ頭巾、柿ノ御衣ヲ召」したとされている。長い爪やざんばら髪、柿の頭巾や柿の衣は、いうまでもなく天狗の象徴である。延慶本の文脈だと、崇徳院は五部の大乗経を書写する前の段階ですでに天狗の姿になっている。つまり、配流に処した後白河院の寛容のなさこそ、崇徳院を天狗にさせ、五部の大乗経を書かせた直接の契機になっているといえる。鎌倉本『保元物語』も延慶本と同じく、怒りゆえに指の血をもって全経を書写したとされている。

一方、半井本『保元物語』にも後白河院の非情さを訴える文章や天狗の形相になったという文章はあるが、それは五部の大乗経の入京が拒否された後のこととして出てくる。また五部大乗経を書写し終えたことを伝える覚性法親王宛ての手紙の中で、書写の目的をはっきりと「後世菩提」と語っている。ということは、半井本『保元物語』では、五部の大乗経の入京の拒否こそ崇徳院を天狗化させた原因であることを意味する。書写の目的と崇徳院の天狗化の動因は区別されているといえる。半井本『保元物語』の他に、長門本『平家物語』と闘諍録、盛衰記、そして京図本・金刀比羅本・古活字本『保元物語』がこのような立場をとっている。この場合、崇徳院の怨念の対象になるのは、経の都入りを断った後白河院や信西、そして朝廷になるのである。この差異は天狗と怨霊の性格の差異を反映しているのかもしれない。なぜならば、

延慶本や鎌倉本は、後白河院に対する恨みが前景化されており、後白河院が対峙すべき存在としての〈怨霊〉的要素が色濃く残っている。これに対し、半井本の崇徳院怨霊譚は、後白河院だけではなく、複数の人間が恨みの対象になっており、特に朝廷という言葉に象徴されているように、崇徳院怨霊は「日本国」と対立する〈天狗〉として登場しているからである。

このように、天狗の形相になる契機は異なるが、崇徳院が生前すでに天狗になったという点においては、『平家物語』や『保元物語』諸本が共通していることはいうまでもない。長い爪、伸ばした髪、柿の衣や柿の頭巾といった天狗の形相は、崇徳院のシンボルになり、やがて金刀比羅本『保元物語』にある平康頼の目撃譚にまで発展されるのである。では、崇徳院怨霊譚において、「生ナガラ天狗」になるということはいかなる意味をもっているのであろうか。半井本『保元物語』の次の引用は、この問題を考える際、示唆するところが大きい。

其後ハ御グシモ剃ズ、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、中二年有テ、平治元年十二月九日夜、丑剋ニ、右衛門督頼信ガ左馬頭義朝ヲ嘩テ、院ノ御所三条殿ヘ夜打ニ入テ、[16]

引用は、崇徳院が舌の先を喰い切ってその血で誓状を書いた後の文章である。崇徳院が「日本国ノ大悪魔ト成」ることを誓い、天狗の形相になった結果、平治の乱が起こったという書き方になっている。なぜここで平治の乱が取り上げられているのであろうか。それは保元の乱に続く内乱であるという理由だけに起因しているものではなかろう。平治の乱は、藤原信頼と源義朝が起こした謀叛で、最終的には清盛によって鎮圧された戦乱である。清盛は、保元・平治の二つの戦乱による源氏の滅亡を背景に、宮廷政界に独歩的な地位を築きあげた。そういう意味で平治の乱は、平家の栄華の礎になった画期的な事件だといえる。半井本『保元物語』にも、平治の乱後の平家の繁栄は源氏の衰退を背景にして語られている。このようなスタンスは、清盛の讒言により親や兄弟を殺さざるを得なかった義朝が、二、三年のうちに失脚するだろうといった乙若の予言の実現をもって平治の乱の結末を語っていることからも窺える。生きたまま天狗になったという叙述や崇徳院と平治の乱を関連づける叙述は、崇徳院の怨念と清盛の栄華を結びつけることで、王朝的秩序の破壊をもたらしていったという史実へとつらなっていったのである。

崇徳院怨霊はもともと安元年間の不安な世相を背景に登場したが、物語において崇徳院の怨念は、そのような史実をはるかに越えて、清盛の栄華や悪政を媒介にして保元以後の世の乱れと結びついていったが、その始発が平治の乱であった。このような崇徳院の怨念が清盛を媒介して乱世と結びつく物語の叙述の方向性は、公卿日記にみる貴族の認識と差異を見せている所でもある。公卿日記に見られる崇徳院怨霊の登場は、安元年間に始まり、ピークに達したのは寿永年間であるが、『平家物語』では寿永の内乱には崇徳院の名前はみえない。寿永二年七月の平家一門の都落ち、それによる後鳥羽院の即位、十一月の法住寺合戦、寿永三年一月の義仲の敗北と二月の義経入京といった、目まぐるしいほど急変する不安に満ちた動乱のなかで、貴族たちが崇徳院怨霊の跳梁を感じたのも当然であろう。[17]天下を滅ぼす趣旨が書かれている崇徳院の血経が元性法印の許にあるという噂が広がったのも、寿永二年七月のことである。しかし『平家物語』では、治承五年の清盛の死以降、崇徳院の怨霊の跳梁を語る叙述はみえなくなる。[18]そういう意味で、治承寿永の内乱を身をもって体験した人々が感じた崇徳院怨霊の跳梁のピークと『平家物語』や『保元物語』における崇徳院怨霊の跳梁のそれとの間にズレがあるといえる。崇徳院怨霊譚における清盛の比重の変化から生まれたこのズレこそ、二つの物語の崇徳院怨霊譚を理解する際、重要な鍵になるといえる。

五　もう一つの崇徳院怨霊譚――建礼門院御産をめぐって――

前述したように、崇徳院の〈怨霊〉という霊格を考えると、対峙すべき存在は清盛ではなく、後白河院である。また、白崎祥一が指摘しているように、保元の乱と清盛の悪行は直接的には何のつながりももたない。[19]とするならば、崇徳院怨霊の鎮魂の問題は、兼実の発言どおり、後白河院が担うべき問題である。しかし『平家物語』では、崇徳院の怨霊は清盛を媒介して世の乱れを惹き起こしている。前節までは、崇徳院怨霊の誕生と物語化の方向という面で、清盛との関係を軸に崇徳院怨霊譚を考察してきた。ただ誤解のないようにいえば、崇徳院と後白河院はというと、『平家物語』において全く関係ない存在として描かれているわけではない。特に、延慶本の場合、後白河院の灌頂を取り巻く一連の物語のなかに、後白河院と対決する存在として〈天魔〉が登場するが、その〈天魔〉は、武久堅が指摘しているように、「法皇御灌頂事」の直前の物語である崇徳院怨霊譚に〈天狗〉と化して巣くっていた[20]ものである。延慶本における後白河院と〈天魔〉や

〈天狗〉、そして崇徳院怨霊との関係については、灌頂記事や天狗問答、蓮如の夢などを中心に、以前検討したことがある。[21] 本節では角度を変えて、清盛と後白河院、そして崇徳院が微妙に交差する建礼門院の御産記事を中心に、三人の関係を考察してみよう。

平家の栄華を決定づけた出来事は、いうまでもなく建礼門院による言仁親王、後の安徳天皇の誕生であろう。それゆえに、『平家物語』には安徳天皇の誕生にまつわる数々のエピソードが載せられている。皇子を授かるための清盛夫妻の祈りを始めとして、懐妊から出産にいたるまでの様子や儀式が詳細に書かれている。院政期の女人にとって、出産は命をかけたものであり、怨霊らが自分の恨みを晴らすため、絶え間なく母子の命を狙う絶好の機会として認識されていた。そのため、怨霊から母子の命を守るために数多い儀礼や加持祈祷が行われた。当時女性にとって出産は、まさに生死の境界に身をさらすことであり、命を狙う怨霊たちと命を守ろうとする祈祷のせめぎ合いの場であったといえる。建礼門院の場合も例外なく、怨霊に悩まされる。

カヽリシ御悩ノ折節ニ合テ、シウネキ物気、度々取付奉ル。有験僧共アマタ被召テ、護身加持隙モナシ。ヨリマシ明王ノ縛ニカケテ、サマ〴〵ノ物気顕タリ。惣テハ讃岐院ノ御怨霊、別ハ悪左府ノ御臆念、成親卿、西光法師ガ怨霊、丹波少将成経、判官入道康頼、法勝寺執行俊寛ナムドガ生霊ナムドモ占申ケリ。（二三四頁）

建礼門院は着帯後、月を重ねるにつれて容態が悪化し、加持祈祷が絶え間なく行われる。引用はその加持祈祷によって、建礼門院を悩ました物の怪たちの正体が明かされる場面である。物の怪の正体として、一番先に名乗りをあげたのは、崇徳院の怨霊である。そして次に頼長・成親・西光の怨霊と成経・康頼・俊寛の生霊が名乗りをあげたとされている。崇徳院と頼長を除いては、鹿谷事件の関連者で清盛によって殺されたり配流された人々である。鹿谷事件の犠牲者のなかに、保元の乱の敗者の霊が混ざって顕れるという不思議な光景である。建礼門院の懐妊は、世間を騒がした鹿谷事件が起きた次の年の出来事であったので、成親等の怨霊や生霊が顕れることはある程度予想されたことであろう。そして場面はこの後、顕れた物の怪を鎮めるための慰撫行事に移り、大赦による鬼界島の流人たちの喜びと悲しみが描かれていくことになる。このような物語の展開からすると、この建礼門院御産記事の中心は、鹿谷事件関連の怨霊の跳梁とその鎮魂行為にあっ

たと思われる。これは建礼門院が清盛の娘であることによるものである。

ところで崇徳院や頼長の怨霊を鎮めるための沙汰は何も見あたらない。怨霊の顕現と慰撫行事という線で考えても、崇徳院と頼長の出現はあまりにも唐突である。このような唐突さは、建礼門院の御産の場に、安産を妨げるために、成親と西光の怨霊だけが顕れたということからも窺える。崇徳院と頼長の怨霊は、鎮魂のための何の措置も取られないまま、突然姿を消してしまっている。この問題については、以前論文で少しふれたことがある。[23] つまり、建礼門院の御産のクライマックスに、後白河院が験者の役をつとめ、怨霊を調伏するという構図上、顕れる怨霊は後白河院に説得され得る怨霊でなければならない。御産に顕れた怨霊は、清盛に恨みをもっているとともに、後白河院の「朝恩ニヨリテ、人トナリシ輩」に限定される必要があったのである。〈帝王の力〉によって鎮めることができない崇徳院の怨霊は、もともとこの場面に登場する余地がなかったといえる。

延慶本の建礼門院の懐妊と出産にまつわる二つの怨霊譚は、鬼界島の流人の赦免と後白河院の験者ぶりという、それぞれ別のモチーフをもつ全く別個の話であったと思われる。そういう意味で、二つの怨霊譚に整合性を求めること自体が無理かも知れない。しかし、このような延慶本の記述の矛盾は、語り系諸本では見えない。というのは、最初に顕れた怨霊の顔ぶれは延慶本と同じであるが、崇徳院と頼長の怨霊にも慰撫行事が行われたと叙述されているからである。そのために語り系諸本では、治承元年の出来事である追号と贈官贈位が一年繰り下げられて、建礼門院の着帯後、怨霊の跳梁を鎮めるために清盛によってとられた処置として叙述されている。語り系は鬼界島の流人の「赦文」よりも先に崇徳院怨霊の慰撫行事が語られている。それに追号や贈官贈位に因んで、怨霊の怖ろしさが崇道天皇や元方の例を通して改めて確認されている。崇徳院と頼長の怨霊の鎮魂に引き続き、鬼界島の流人の赦免が語られている語り系諸本では、怨霊の跳梁と鎮魂という一本線で貫かれているといえる。

このような語り系諸本の記事に見られる物語の整合性・合理性とともに注目しなければならないのは、崇徳院や頼長の怨霊が他の怨霊と同じく清盛に怨念をもって建礼門院を悩ますために顕れたという物語の文脈である。清盛による慰撫行事が行われる所以もそこにある。この場合、崇徳院怨霊と対峙しているのは、後白河院ではなく清盛である。そして崇徳院の怨霊の霊威も縮小され、清盛の追号によって簡単に鎮まってしまうことになる。要するに、語り系諸本における崇徳院怨霊は、『平家物語』の構想にかかわる重要な役割を果たしていない脇役的存在になり下がっている。平家一門に焦点

を当てて語る語り系『平家物語』の文学性を考えると、当然の帰結であるかもしれない。それは追号にもかかわらず、鎮まることなく跳梁し、様々な世の乱れを引き起こす延慶本の崇徳院怨霊と決定的に違うところでもある。

六　おわり

崇徳院怨霊は安元という不安に満ちた時代を背景に生まれた言説である。崇徳院ゆかりの人々によって復権のため強調されはじめた崇徳院怨霊の鎮魂は、安元三年の追号までたどり着くことになる。しかし、治承寿永の内乱という言葉が示すように、時代はますます混乱の渦巻きのなかに入っていく。その反映として崇徳院怨霊を畏怖する記事が治承寿永年間の公卿日記に数多くみられるようになる。『百錬抄』の「天下不静。依有彼怨霊也」に代表される乱世を紡ぎ出す元凶としての崇徳院怨霊が歴史の舞台に登場したのである。しかし公卿日記に見られるこれらの記事はまだ断片的で、人によって見解が違うこともあり、そこから乱世の実相において崇徳院怨霊がいかなる意味をもっていたのかを追求することは難しい。

一方、『保元物語』と『平家物語』は、この断片を結びつけるように崇徳院怨霊の物語をつむいでいく。その際、核になっているのは、いうまでもなく「日本国ヲ滅ス大魔縁」という言葉である。二つの物語にある崇徳院怨霊譚は、崇徳院が恨みをもち、「大魔縁」になる過程だけではなく、崇徳院怨霊が如何なる方法で「日本国ヲ滅」ぼそうとしたのかも語られている。特に、後者の場合、崇徳院怨霊の代理役として自らの手で乱世を招く重要人物として浮上したのが平清盛である。『保元物語』の場合、前者の方に重点が置かれており、後者は付随的なものになっている。これに対して、延慶本『平家物語』は清盛の悪行という文脈とかかわって、むしろ後者の描写に力が入っている。『平家物語』において清盛と崇徳院怨霊の結びつきの緊密さは、清盛の死去後相次ぐ戦乱に見まわれるにもかかわらず、崇徳院怨霊の跳梁が以後『平家物語』の中から見えなくなったからも窺える。程度の差はあるが、二つの物語に共通する清盛と崇徳院怨霊の関係の強調は、言ってみれば、公卿日記の断片的な記事が『平家物語』や『保元物語』のような物語に結実する際起こった変化、すなわち物語の意図であるといえよう。

しかし語り系諸本になると、同時代の息吹を伝える崇徳院怨霊の国家と対峙するがごとき〈力〉はもはや見いだせなく

なる。つまり、清盛の身を借りて後白河院政を脅かす、〈怨霊〉の枠を超える存在としての崇徳院怨霊像はなくなったのである。代わりに、清盛との結びつきだけが残り、清盛に恨みをもった王朝的怨霊になり下がっている。語り系諸本にみられる崇徳院怨霊の矮小化は、建礼門院を悩ました他の怨霊たちと同じく、清盛の慰撫行事によって簡単に鎮まってしまうことからもいえよう。このように、『平家物語』における崇徳院怨霊の霊威は縮小されてしまうが、それとは別に、崇徳院が金の翼をもった「大天狗」として『太平記』に復活し、〈天狗〉らを率いてまたしも乱世を紡ぎ出す存在として中世を通して生きたことも忘れてはならない。その意味で、『太平記』の天狗としての崇徳院は、延慶本の崇徳院怨霊の新しい姿であるともいえよう。

注

本文中に引用した『平家物語』のテキストは、『延慶本平家物語』（北原保雄・小川栄一編、勉誠社、一九九〇）に拠った。

(1) 山内益次郎『今鏡の周辺』（和泉書院、一九九三）二頁。

(2) 植木朝子「梁塵秘抄四〇五番歌私見」（『国文』七四、一九九一年一月）四〇～四一頁。

(3) 山内益次郎、前掲書、七頁。氏の「地方的伝承は、類ない高貴な院がこのような辺地に在住された事にあるいは畏敬し、あるいは同情して貴種流離談を育てあげた」という指摘は、崇徳院説話の怨霊譚以外の発展性を考える際、示唆に富んでいる。

(4) 山田雄司『崇徳院怨霊の研究』（思文閣出版、二〇〇一）七六頁。

(5) 海野泰男『今鏡全釈上』（福武書店、一九八二）、三七四頁。

(6) 多賀宗隼「今鏡試論」（『史学雑誌』八三―二、一九七四年二月）四頁。

(7) 山田雄司、前掲書、七三頁。

(8) 原水民樹「崇徳院の復権」（『國學院雑誌』一九八六年八月）三八～四二頁。

(9) 安元三年五月十七日に讃岐院に関しては五ヶ条、頼長に関しては四ヶ条の鎮斎が決定される。そして予定では五月十八日挙行のはずであったが、「日次不快之間遅々」といった事情や最終的な案の練り直しを経て、結局七月二十九日の実施へとたどり着いた（原水民樹、前掲書、四一頁）。

(10) 岡見正雄・赤松俊雄『愚管抄』〈日本古典文学大系〉（岩波書店、一九七一）二四六頁。

(11) 『玉葉』安元三年七月二九日条。

(12) たとえ怨霊といってもすばらしい人格の持ち主には祟りがたいと信じられた例は、『大鏡』の道長や『愚管抄』の忠通評にみえる。

(13) 栃木孝惟・日下力・益田宗・久保田淳『保元物語　平治物語　承久記』〈新日本古典文学大系〉（岩波書店、一九九八）一三四～一三五頁。

(14) この問題について白崎祥一は、「『保元物語』の一考察―讃岐院記事をめぐって―」（『古典遺産』一九七七年七月）のなかで、長門本の過失である指摘している。それに対して原水民樹は、長門本の矛盾こそ、夢想譚が本来幽閉事件と密接につながっていた証拠であると述べている（「清盛の悪行にかかわる夢想譚」（『徳島大学学芸紀要』三〇号、一九八三年三月））。

(15) 原水民樹、前掲書、四頁。

(16) 前掲書、一三三頁。

(17) 崇徳院於讃岐、御自筆以血令書五部大乗經給、件經奥、非理世後世料、可滅亡天下之趣、被注置、件經傳在元性法印許、依被申此旨（『吉記』寿永二年七月十六日）。

(18) 延慶本では、治承三年クーデター以後、崇徳院の怨霊が語られるのは、「皇嘉門院崩御事」（第三本）、寿永三年四月十五日の崇徳院・頼長廟遷宮を書いた「崇徳院ヲ神ト崇奉ル事」（第五末）ぐらいしかない。これらの記事には、皇嘉門院の崇徳院の為の追善供養や往生を思わせるような最後、厳かに行われた遷宮の儀式などが叙述されているが、怨霊として跳梁などにはふれていない。

(19) 白崎祥一「保元物語における崇徳院の形象化―怨霊叙述を中心に―」（『中世文学　資料と論考』（笠間書院、一九七八）一六八頁。

(20) 武久堅「平家物語、その変身―後白河院「伝奇」と「住吉大明神」を中心に―」（『軍記と語り物』三一号、一九九五年三月）一〇頁。そして、延慶本において天魔（天狗）、後白河院、崇徳院の関係については、以前天狗問答や蓮如の夢の分析を通して論じた事がある。

(21) 拙稿「後白河院と天狗―延慶本『平家物語』における天魔、魔縁、天狗を中心に―」（『日本語と日本文学』三四、二〇〇二年二月掲載予定）。

(22) 拙稿「延慶本『平家物語』の成親説話考（上）―怨霊譚を中心に―」（『日本語と日本文学』三一号、二〇〇〇年八月）。